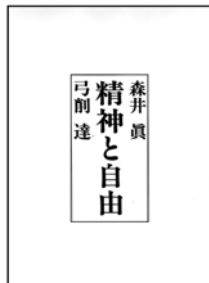
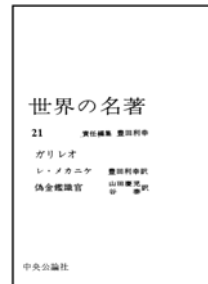
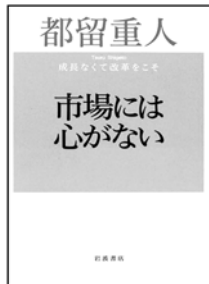


【書評】

## 「国際学」入門おススメ6冊

——ボクのセンセイ，コクサイ：国際学部1990年代——

勝 俣 誠



「どんなにITが発達し，高速・大量にいつでもどこでも情報にアクセスできたところで，一人の人間が一生に知って考えることは限られている。」<sup>(1)</sup>

### はじめにーコクサイとは

君たちの入学した国際学部は，国際学の学部で，日本語以外の言語や，日本以外を学問対象とするから国際的学部というわけではない。では国際学とは何か。英語では，International Studies とあり，複数となっている。これこそ「国際学」という明確な定義は今だにない。

私としては，国際学とは「世界をまるごと解説する学び」とくらいにしておきたい。「まるごと」

などという表現を使うと，「大雑把」，「大まか」といった余り学問的でない響きを持つが，あえて使いたい理由は，私が1988年「国際学」の学部で教員としてきて，ピッタリとした表現であると実感するからだ。

とりわけ21世紀に入って，この自分の生きる今日の世界をまるごと説き明かしてみようとすることは極めて大切に思えるようになった。

このことをひっくり返して言えば，今，私たちの世界・社会は，まるごと考えようとすることを妨げられている時代に入ったということだ。

一人の人間は、生まれてから死ぬまで一つの身体と周囲との関係をひきずってその時代を生きていく。彼・彼女は時々、選択しながら自分の人生の方向を決めていく。その際、大量の情報を得て、処理する手段は人類史未曾有の発展を遂げ、その伝達と速度の増加は止まることがない。これは一見、より効率よくモノ・コトを知って、決めていく上で結構なことのように見えるが、多くの場合、いつのまにか細部にのみ注目し、世界・社会が一体どんなになって、どこに向かっているのかを考えることがなくなっている。

ありとあらゆる情報が飛び交い、いとも簡単にそれらにアクセスしたり、そのネットワークに加わる時代にあって、もう一度、立ち止まって、この世界の正体をまるごと解説してみようとする知的作業とその段取りを学ぶこと、これが国際学の課題だ。

ただ、国際学の領域はまるごとといっても、何でもありの「学」ではない。大学において学問とは、学問分野を英語では discipline（＝規律）と表現するように、それぞれの学問分野のワクを決めて、そのワク組の中で、考えを積み上げていく。この規律をある程度しっかりと踏まえないと、問題の切り口がなかなか定まらなかったり、持続的にモノ・コトを考え続けることによる知の体系的蓄積が難しくなってしまう。

たとえば、「生きる」というコトをどう学ぶのかという問いをこの discipline から仕分けてみよう。大きく分けて、3つの学問分野からのアプローチが可能となる。

一つは、「生命」の解明だ。ヒトは食べたり、寝たり、排泄したり、生殖したりして生きて（そして死んで）いく。地球・大地の与えてくれる自然の恵みをヒトは絶えず摂取して命を維持する。この現象は、物質代謝（metabolism）と呼ばれ、生き物を学ぶ。このほか、自然界のモノ・コトの動きを測ったりして、その生成を学ぶことによって、飛行機が考え出されたり、核兵器も製造された。これらは、一般に自然科学と呼ばれ、生物学、物理学、化学などがこの中にはいる。

次に、人は一人で生まれ、一人で生きて

いけないことに注目する。生まれたときから関係性を背負って生きていく。人々が生きていくためのルールを決めたり（法学・政治学）、採れたモノを皆で分配したり、売ったり買ったりして生活していく（経済学）。いずれも社会と人間の間を学ぶ分野なので社会科学と私たちは呼ぶ。

だが、これら2つの学問分野では、そもそも人はなぜ生きるのかという問いに答えてくれない。どんなものを食べたら健康にいいのか（自然科学）、どんな仕組みだと世の中は上手く機能するのか（社会科学）という問いは、いずれも、生きていく上で手段についての問いで、そもそもそう考える自分は、なぜ生きるのかに答えていない。

なぜ生きるのか。なぜよく生きたいのか。なぜ美しいモノ・コトを求めるのか。

これらの問いはすぐれて、自分の生きる世界にイミを与えようとする行為だ。より平たく言えば、自分の人生をどうもっていったらいいのかという問いだ。哲学、宗教学、文学、歴史学などの一般に人文科学（humanities）と呼ばれる学問分野がそれらに答えようとする<sup>(2)</sup>。

以上、大まかに、生命、生活、人生という3つの人の命にまつわる学問を分野別（discipline）で分類してみた。君たちがこの学部に入って、気づくように、ヒトの「命」に関わる3大分野に基づいて学んできた教員・研究者の授業・演習が全て用意されている。

もともと、経済学を専攻してきた私自身 1988年に国際学部の教員として着任した当初は、余りこの学部の特色について考えていなかった。二群という社会科学の中の経済学系教員集団に属して、「南北問題」というアジアやアフリカの「南」の地域の開発研究に焦点をあてた国際経済学の一分野を教えるのは、エコノミストの端くれとしてごく当たり前のことと思っていた。

しかし、30人くらいの小規模世帯の学部の多くの教員は私より年長で、同僚と言うよりセンセイというべき大研究者に囲まれていることに、直接話を聞いたり、著作を読んだりしていくうちに気づいた。

経済学のみならず、政治学、物理学、歴史学、

文学の先生方だった。すごい学部に来たと思った。自分のかねがね気になっていて、どうやったら思考の切り口を見つけたらいいのかという、自分の専門以前ないし専門外の諸問題に取り組む道筋を示唆してくれた。そして、自由になって読んで考えた。

これらの先生方が学部を去ってしまった今、自分だけこの壮大な知の出会いの喜びを独占しているのかということで、学部に来た君たちともこの喜びを共有したいと思って、とりあえずこのボクのセンセイの著作を6冊あげてみた。

1. 都留重人 『市場には心がないー成長なくて改革をこそ』, 岩波書店, 2006年
2. 玉野井芳郎 『等身大の生活世界』, 玉野井芳郎著作集4, 学陽書房, 1990年
3. 豊田利幸 『ガリレオ』(責任編集), 世界の名著21, 中央公論社, 1973年
4. 森井眞・弓削達 『精神と自由』, オーロラ自由アトリエ, 1992年
5. 福田歓一 『国家・民族・権力ー現代における自由を求めて』, 岩波書店, 1988年
6. 武者小路公秀 『人間安全保障論序説ーグローバル・ファシズムに抗して』, 国際書院, 2003年

# 1. 都留重人『市場には心がない』, 岩波書店, 2006年

私たちの生きる現代は日本も外国でも決して平和で誰もが安心して暮らせる世界ではない。地球規模の問題に目をやれば、著しい貧富の格差、地球環境の悪化、核エネルギーによる核戦争や原子力発電所の災害など山積みである。

この時代の人類生存への課題をどう読み取るのか。

経済学者、都留重人先生の本書『市場には心がない』は、最後の著作となってしまうが、これらの課題について平易な言葉でその解説の切り口を読者に提示してくれる。とりわけ、経済成長がこれほど語られながら、人々の「豊かさ」が実感しにくい現代社会を、自然環境と労働の関係を通

して鋭い分析をしている。

今日でも、高い失業率をなくすには、経済成長しかないという考え方が一般的で、政治家やメディアの多勢はそもそも経済成長と生きる豊かさとの間に、どのような関係が存在するかなどという問いを先ず考えない。むしろ、市場のグローバル化で、新たな成長のチャンスを見つけるとか、そのチャンスを逃してはならないといった論調が目立つ。

しかし、都留先生は、こうした短絡的思考から距離を置き、すでに日本が高度成長を遂げていた1970年に、経済成長とは何かをしっかりと見抜いていた数少ないエコノミストであった。当時日本は、誰もが自家用車を持てそうになり、新たな便利さの登場に両手を挙げて喜んでいた。しかし、他方では、政府と大企業の癒着で、大規模な環境破壊が推進されていった。水俣病はやみくもの経済成長が生む害の最たる負の影響であった。

都留先生は、1972年に「公害の政治経済学(岩波書店)」(英文は The Political Economy of the Environment - The Case of Japan, The Athlone Press, London, 1999年)を刊行された。その本はチッソ企業による水俣病や石油加工施設による四日市ぜんそくなどの地域住民の健康や生命にマイナスの影響を及ぼす公害をどう政治経済学から理解したらいいかを明快かつ深いアプローチで教えてくれている。

これらの著作は、現代日本における環境経済学の先験的作品であるが、そのユニークなアプローチは本書でもしっかり展開されている。

地球環境を分析・考察する経済学は地球温暖化の深刻化する中で、ますます重視されてきている。しかし都留アプローチは、自然環境は市場価格なく、タダだから、濫用や破壊があるとして、それらに価格をつけて、コストとベネフィットを比較すればいいという手法に立つ主流の経済学と異なる。いわゆる外部負(不)経済アプローチと異なるということだ。

都留アプローチとは、市場メカニズムを越えるより大きなワク組を設定して、環境問題を捉えようとしていることで、2つの特徴を持っている。

第1は、環境問題を「素材」(real, physical aspect)と「体制」(institutional aspect)という2つの側面からアプローチすることを提案していることである。素材面とは、いわば自然の摂理のようなもので、時代によって変化しうる体制面と区別されて論じられている。もう一つの大きな特徴は、前者が後者に対して優位を持つことを必要としている点である。

都留先生は、これを宇宙船地球という表現で、地球上に存在する「国家」にとっては、「外部」だが、地球にとっては「内部」であるとされる再生産不可能な資源枯渇、地球温暖化、核爆発による放射能汚染などの問題群を挙げている。

都留先生が心配されたのは、これらの問題がいずれも体制面から生まれるのではなく、「地球全体を内部とした素材面の現象」(164ページ)であるので、本来、人類の知恵で管理しなければならないが、今のところこの宇宙地球号には船長がいないという点であった。全くである。どうやったら、私たち人類はグローバル資本主義という現体制によって規定されて「内部」の論理が生むこうした偏りを正して、個人や企業や政府がこの地球を私たちの後の世代に遺せるのか、都留先生はそれぞれに対して、実に骨太の切り口を私たちに提示してくれている。その一つ一つを深めていくのは、君たちも含めた私たち学徒(scholar)の仕事だ。

とりわけ、都留先生が今から40年以上も前から主張されてきた経済成長は手段であって、目的ではないという考え方は、今日、ますます人類生き残りのシナリオを考える上で多くの研究者が様々な分野から取り組みだしている<sup>(3)</sup>。都留先生のような社会科学全体を駆使して問題設定するスケールの大きな研究の切り口は、国際学部にあるような直ぐには役立たないが、世の中をまるごと説明するにはどんな切り口が存在するのかを学ぶカリキュラムによって初めて可能になるのであろう。

## 2. 玉野井芳郎『等身大の生活世界』, 学陽書房, 1990年

玉野井先生は、1985年私たちの国際学部の教授

として着任された。しかし同じ年に亡くなられてしまったので、私は学部ではお会いする機会にはなかった。しかし、1986年、哲学者イバン・イリイチの来日の際に東京でお目にかかったことがある経済学者である<sup>(4)</sup>。

玉野井先生も都留先生と同様、時代の問題に対してヒト事ではなく、自分の学問の問題として正面から向かい合った経済学者である。

日本では、2011年3月11日事件以来、原子力発電所の文明的危機についての論考が急増したが、玉野井先生はすでに1980年代に、生命系の重視する経済学の観点から、山口県上関にもちあがった原子力発電所計画について、誘致に賛成する上関町とそれに反対する祝島(いわいしま)との対立に心を痛められていた。

当時すでに玉野井先生は、原発推進派が反対派を札束でねじ伏せようとしていた事態を告発し、「短期の視点からカネよりも、次の世界に誇りを持って残すべき自然環境の大切さを選択的に認識できる人たちが地元に増えてこなければならない」と述べられていた<sup>(5)</sup>。

環境問題のエコノミストとしての読み方として、玉野井先生のアプローチは、都留先生と同様経済学の幅広い学説史を踏まえて持論を展開していたが、環境悪化の説明要因を、物理学に登場する熱力学の一法則であるエントロピーの増大に求めた。

この法則と玉野井経済学の結びつきは安易な解説を許せない深遠なものだが、環境問題へのアプローチに関しては、経済活動はエントロピーを増大させ、有限資源の枯渇を生むということである。

さらに、玉野井先生はこのエネルギーの交換と代謝を結びつけて、経済学の中に「生命の世界＝生態系の世界」を復権させようとした<sup>(6)</sup>。市場と値段がないと成立しない商品のワク内で、生産と消費についての論理を展開する主流経済学に対して、玉野井アプローチは、本来商品とはなり得ない生身の人間の労働や自然の別称である土地のイミを、もう一度経済活動の中に位置づけようとしている。

この思考の営みは経済学以外の学問分野にもどんな関心領域を広げていくかを探ろうとする、飽

くなき好奇心なくして実現しない。

この壮大な玉野井経済思想をかいまみる本としては、とりあえず読みやすい『等身大の生活世界』をおすすめしたい。「地域」と「エコロジー」をキーワードとして、現代人の生活の現場で起きていることをどう読み解くのかを、ジェンダー関係まで含めて、私たちに切り口を教えてくれる。しかも先生は、この本に収められている学生、研究者向けの論考では、学生たちに向かってマルクスの愛したモットーである「すべては疑いうる」を最後に述べて、既存の経済学のワク組の上に安住することを戒めている<sup>(7)</sup>。

### 3. 豊田利幸(責任編集)『世界の名著 ガリレオ』、中央公論社、1973年

豊田先生は私が国際学部に着任したときすでに「平和学」を担当されていたと同時に、当初国際学部の付属研究所であった国際平和研究所の初代所長でもあられた。

当初、余りお話しする機会がなかったが、ガリレオの研究でも知られている物理学者であることを聞いていた。先生の業績や活動を身近に知ることになったのは、私がこの国際平和研究所の所員になり、所員会議などで直接いろいろとお話を伺うようになってからだった。

豊田先生が平和研にいらっしゃったのは先生は核開発に人類は手を出すべきでなく、核なき世界を訴えていることで日本のみならず、世界的に知られている闘う大学知識人だったからである。冷戦期においても、冷戦後においても、先生は精力的に核の恐ろしさを知ってしまった物理学者として、数々の著作を世に問うてきた。

君たちに国際学の醍醐味を知ってもらうために豊田先生の手がけられた一般書の中でおススメは、先生が責任編集なさった『世界の名著 ガリレオ』だ。

高校、中学程度の自然科学の知識で理解できるとこのガリレオ著作集の中で述べられているが、遠心力の定式化の記述などは私がすべて完全に消化できているわけではない。

しかし、あえて、『世界の名著』とありながら、君たちにススめるのは、ガリレオ著作の邦訳量にせまる豊田先生自身によるガリレオの生き様とその業績の解説があるからだ。

地動説で知られるガリレオの業績をもう一度教科書的に理解して欲しいからススメルのではない。その理由は何よりも先ず、豊田先生の編集された本書では、16世紀に現在のイタリアで生まれたガリレオがどのように自然科学から世界＝地球の動きを説明しようと身近な自然現象の解明から出発し、最後に自説故に宗教裁判によって言論を封じられ、生涯を終えるガリレオの生き様が、それを解説する豊田先生自身の生き様と今となっては重なってしまうからである。

豊田先生の「ガリレオの生涯と科学的業績」は、彼の地動説を中心とする物理法則、天体の動きを学者として解説しただけでなく、ガリレオがどう科学の真理を発見しようとし、そのために時代の偏見や権力の圧力と闘ったか、彼の生き様をイタリアの地に自ら赴きながら読者に伝えようとした。

国際学部に来た頃、時々JR 目黒駅で降りて、白金キャンパスに向かうとき、よく目にしたのは改札口の手前の壁に掲示されていた、マック・ドナルドの隣の広告だったと思うが、「真理は君たちを自由にする」(ラテン語では Veritas Liberabit vos.)といった明治学院大学の広告であった。そしていつの間にかその広告はなくなった。

私は、大学が守り発展させるべき大切な理念ないし使命(mission)の一つがまさにそれだと思い、うれしかったのを覚えている。そして、今も明学のモットーとして素晴らしいと思っている。

こうした理由から、本書は、一人の人間が時代の制約の中で、真理を見つけようと格闘する二人の研究者の学問に対する姿勢を力強く読者に伝えてくれる。ガリレオに関して言えば、当時真理の最終的決定者はローマ法王であったが、天動説(Ptolemaic)を真理としていた。これに対しガリレオは、自然の法則と聖書の言葉は対立しないことを力説し、救霊(Salute)と地動説という科学的真理は目的が異なるとしている(104ページ)<sup>(8)</sup>。結局、ローマ法王がガリレオに対する裁判の過ち

を認め謝罪したのは1855年であった。豊田先生も学問する学者・教員は真理を追究することを第一の使命とし、時の権力や権威の圧力に屈してはいけないということを守るために身をもって闘った先生であった。

2011年3月11日に生じた東日本大地震による福島第一原子力発電所の重大事故以来、原子力発電の安全性を隠蔽したり、歪めて伝えてきた自然科学者の社会的責任が大きく問われてきている。しかし、豊田先生はすでに電力会社、大学、政府との癒着に怒りを示されていた。例えば、2007年原子力科学者による米国雑誌には、「核エネルギーにNO」というタイトルで、次のように明言している<sup>(9)</sup>。

「今後も原子力発電所の建設を許せば、世界中がこの問題（核廃棄物の危険、筆者註）に直面することになります。何千年も先の世代に危険な高レベルの放射性核廃棄物を押し付ける権利は、私たちにはありません。それは人類の将来に対する、そしてこの地球に対しての究極の罪となるでしょう。（・・・）私は、政府や産業界にこうした代替エネルギー開発を妨げてきたのはあきらかのように見えます。彼らの罪は許されるべきではありません。」<sup>(10)</sup>

本書で、豊田先生は時流に屈しない学問の追究に対して、ダンテの「神曲」の一節を引用し、ガリレオの弟子たちもその批判精神を受け継いだことを述べられている（145ページ）。

「試みて、そして試みて」（provando e riprovando）

豊田先生はこの批判精神を物理学に結びつけて、この学問の深さ、豊かさについて次のように記している。

「物理学は日常身の自然現象の究明から、それぞれの段階において統一的世界像の建設を目指すものである。ガリレオはそれを身をもって示したのであった。しかしこれは、われわれの自然認識のみならず、広い意味での世界観の根源的問いかけを含んでいるから、当事者が好むと好まざるを問わず大きな社会問題に発展する可能性がある。」

豊田先生は、まさにこの20世紀後半から引き

ずってきている核戦争と原発災害という人類的社会問題を正面から受け止め闘ったガリレオ精神の後継者と言える。

#### 4. 森井眞・弓削達『精神と自由』、オーロラ自由アトリエ、1992年

国際学部で国際学を学ぶということは、国際社会ですぐに役立つ学問を学ぶことを一義的に目的としていない。繰り返す如く、明治学院大学の理念が「真理は君たちを自由にする」ことだし、国際学部を1986年に設立したときの趣意書にも明記されている。

大学の教員はこうした意味から、この自由を考え、教えるという使命を時代の前で絶えず検証される。利潤を上げられない私企業がいずれ破綻するように、真理の追究という一義的使命を忘れ、時代に迎合してしまう大学は学生を集めれば良いと言う単なる営業組織に陥ってしまう危険を常に伴う。

私が国際学部に入った1988年はまさに、明治学院大学はダイガクとしてのその使命が試される時代であった。昭和天皇の健康が悪化する中で、政府やメディアはこの状況を一回は敗戦によって明確にしたはずの国民主権の原則を曖昧にし、国民・市民に対して、この事態を特別扱いするムードづくりに世論を導こうとしていた。

私自身、第二次世界大戦後の1946年、東京の新宿区に生まれ、空襲による焼け野原でかくれんぼをしたり、図画の写生をしたりした世代である。新憲法によって規定された天皇はもはや政治権力ではなく、英国やオランダのような象徴に過ぎないと思っていた。しかし、明学に来て、天皇の健康状態を政治利用しているいわゆる「自粛」ムードがいかに関心の自由、市民の自由にとっていかに深刻な脅威であるかをキャンパス内の教員有志による連続セミナーや当時の学長の声明を記した立て看板で否応なく知ることとなった。

大学人であるということは時代に対してどんな義務を負うのか、研究者として、教育者として何をしなければならないのか。

この問いをあの時代に覆い尽くそうとした「自肅」ムードに勇気を持って（ムード推進派による物理的嫌がらせにもかかわらず）、「自由であらねばならない」とはっきり主張した明学のセンセイの登場する対談集はおススメである<sup>(11)</sup>。

このいわば国家という巨大な権力と考える自由、信じる自由を守ることなくして一時も発展も出来ない学問のシティーである大学との緊張関係を本書はリアルな発言で私たちに伝えてくれる。

登場するのは、当時の学長で、ヨーロッパ史の森井眞先生と当時のフェリス女学院大学の学長であられた古代ローマ史の弓削先生であった。

この二人の大学人は精神の自由こそが人間が人間である根拠であり、それが奪われそうになったら闘うこと以外にないということを改めて力強く訴えている。知を職業とする知識人（たとえ大学にいても、いなくても）は時代の文脈から自由になることは出来ず、その行使が危うくなるときは毅然として自らのスタンスを表示しなければならないのだ。

森井センセイは、なぜ立て看まで出して、自分の考えを表明したかということに対し、「大学生に対する責任」（18 ページ）であると話されている。森井センセイのこの発言は戦争中、いかに国家権力が自分の青春を翻弄してしまうかという自己体験からきている。

時代のムードに翻弄されない大学、そして知識人。これは、危機においてしか見えてこない。本書の中で、森井センセイは「現代社会において自由というコトバは氾濫し、インフレ状況になるが、それが危機にさらされたとき、その自由の内実が問われる（62 ページ）」と話されている<sup>(12)</sup>。

では、自由とは何か。それは「奪われうることの創造力を持つ自由（117 ページ）」であり、「国家権力に放ってもらふ自由（126 ページ）」でもある。

さて、このボクにとって、国際学部着任元年に当たった激動の1988年以降、本のおススメではないが、国際学部のカリキュラムの2大キーワードである平和とアジアについて、1995年のロシア経済学者中山弘正先生の明学の学院長としての告白

『心に刻む』も君たちに読むことをすすめたい<sup>(13)</sup>。

なぜなら、戦前ほとんどの日本の大学は学の自由という高等教育研究機関の使命を放棄してしまった。それどころか戦争に協力した。この日本現代史における負の過去ないし過ちを謝罪する文書を中山センセイは出された。

## 5. 福田歓一『国家・民族・権力—現代における自由を求めて』、岩波書店、1988年

世界のニュースを見たり、聞いたり、読んだりすると、今日もヨーロッパでも、アジアでも、アフリカでも人々の対立が様々な理由で生じていることを知る。これらの地域紛争は、紛争当事者の集団を固有名詞で名づけると、イスラエル・パレスチナ戦争、1994年の大虐殺を生じせしめたフツ人対ツチ人、スリランカのシンハラ人とタミール人の対立と表現する。

こうした対立をメディアは、「民族対立」、「部族抗争」などと表現し、あたかもこれらの紛争当事者が背負う民族、部族の多様性こそが安定した国家になれない原因かのごとく伝えることが多い。

しかしながら、今日、国際は英語で international の関係においてごく当たり前のことと了解しがちな国際関係の主要アクターであるネーション・ステート、国民国家、民族国家は、人類史において比較的最近の出来事で、西欧で生まれてから、たかだか450年くらいの歴史しかない。ということは、人類史において国民国家は歴史を越えた普遍的な統治単位ではなく、特定の状況から生まれた歴史的産物であると同時に、これからも人類世界を律する唯一の統治単位ではあり続ける保証はないということを意味する。

政治学をたとえ専攻しなくても、本書を国際学部に入った君たちに勧めるのは、世界の様々な出来事を解説するとき、「国家」とか「民族」とか、「部族」とかいうコトバを介しパワーが暴力的に行使されるとき、そもそも、こうしたコトバはどのように力を持ってきたのか、または自分たちの思考形態に刷り込まれがちなのかを考える機会をつくって欲しいからだ。

冒頭に指摘したように、学問として、世界の様々な出来事を解説するには、各学問分野からの手続きがある。「国家」、「国民」、「部族」なるコトバをとりあえず政治学という分野から考えてみる場合、国際学部の福田歓一センセイの本書は、これらの概念がどのようにして形成されたか、またその限界、問題点はどこにあるのかを提示してくれるいわゆる参考（リフェランス）の書である。

私自身、冷戦末期からポスト冷戦期に入る1990年代のアフリカで生じていく国内対立や武力紛争を外から観察していて、多くが1960年代に主権国家として独立したアフリカにおいて、なぜその領域内で「これが自分たちのクニだ」という国民（ネーション）づくりが必ずしも定着しないのか疑問に思っていた。

そんな中で、アフリカをフィールドとしてきた文化人類学者の川田順造氏と福井勝義氏が編集した『民族とは何か』（岩波書店、1988年）に出会い、福田先生の「擬制としての国民国家－民族問題の政治的文脈」も収められていたことを知った。

本論文では、国家はヨーロッパの歴史からステートとしてみるSと、ネーション国民・民族としてみるNに分けて論じられている。領地の支配を巡る戦争を重ねて自らの絶対的権力を集中させる「絶対主義」と呼ばれる国家モデルは国家Sと呼ばれ、フランスなどではその後にくる国家Nの外ワクを準備していくのだが、現代アフリカ国家は今日の国際関係（international relations）では、国家Nはフォーマルにあるのだが、その中身たるネーションが今ひとつ育っていないという点が明らかにされる。

こうした政治史の支えがあって初めて、アフリカなどの「南」の地域の紛争を、氾濫するメディアの単純な解説に対して、そのコトバのその歴史的形成に遡って理解する手だてを本書は教えてくれている。

それだけではない。本書の最後では日本の憲法の読み方について厳しいアドバイスを与えてくれている。そこでは、グローバル化というモノ、コト（情報）、カネ、ヒトの大規模かつ広域にわたる移動の時代にあって、民主主義をより実質なも

のにしていくには、単に憲法を守ればいいのではなく、何よりもまず人権の視点から、今日の国家Sを支える「主権の概念を生み出した国家の枠組みそのものを問い直す視点」の必要性が強調されている。

## 6. 武者小路公秀『人間安全保障論序説－グローバル・ファシズムに抗して』、国際書院、2003年

2001年のアメリカ合州国での同時テロ事件（以下、9.11と呼ぶ）以来、世界は大きく変わった。日本では、米国が世界に訴える反テロリズムのための戦いに賛同するかのように、電車の中で、空港で、怪しいものを見つけたり、気になることがあったら直ぐ通報して欲しいというポスターやアナウンスメント（英語放送もある）はごく普通の日常風景となっている。

無実の人々を殺害するテロリズムは許されるべきではない。しかし、私たちは、同時に、この「テロリズムの戦い」がなぜ生まれ、どんな背景において続けられているか大学人として考えなければならない。

9.11事件の直後、ある学生が平和学の講義に提出した感想文で、当時のブッシュ政権について、極めて冷静なコメントをよせた。「ボク（ブッシュ・ジュニア大統領）は不当にもなぐられた。ボクは殴られた他の人々の痛みはよく分からないけど、ボクの被った痛みは、全世界の人々にわかってほしい。」

実際、9.11後の米国主導で実現しようとした世界秩序は、この国が育んだ民主主義とは程遠いものであった。国連安全保障理事会の決議を無視、ないし曲解し、誤った情報で踏み切った2003年の米国の対イラク戦争、ドロ沼化し、いまだ平和とは程遠いアフガニスタンの対タリバン戦争、超法規で拷問さえ厭わなかった国外米軍収容所など、この国とそれと同調・加担した国々の負の遺産は深刻だ。

万人が万人に敵対しないで、お互いに相違があってもそれらを認め合いながら、安心して生活

できる世界はどんな世界なのだろうか。

この地球規模の危機を前に文明まで視野において答えようとしたのが本書である。

キーワードは「人間の安全保障 (human security)」である。最近、このワードは、国際社会や日本の「南」の国々の援助政策でもよく登場するが、国際政治学の分析において積極的にこの言葉を使用したのは、私の知る限り、著者の武者小路先生だと思う。センセイと私は、長らく国連大学の副学長を務められていた時代から国際シンポジウムや研究会の合宿などでお話しする機会があったが、本格的にお話を伺えるようになったのは国際学部に来られて以来である。1995年に国際平和研究所の所長にもなられた武者小路センセイは、冷戦が未だ終わったとは言えない東アジアの政治状況において、「人間の安全保障」の観点から研究会と国際シンポジウムを企画することを提案された。それまで私は、この言葉が国連の人間開発論の1994年版や同じ年、コペンハーゲンで開かれた国連による世界の貧困を考えるいわゆる社会サミットでも使われた新語ぐらいにしか考えていなかった。私の研究仲間も同じで、敢えて警備会社や証券会社 (securities company) で使われるセキュリティというコトバを使わなくても、すでにある人間開発や社会開発でいいではないかと、これからは「もう一つの開発、オルタナティブ・デベロップメント」がピッタリだという意見もあった。

しかし、平和研究所での先生の研究会を重ねるうちにセンセイの構想する人間の安全保障がグローバル化時代の国際政治経済を解説するための極めて奥深い概念であることを知った。本書にはいわばその深いイミづけの根拠がしっかりとつまっている。

本書の副題が「グローバル・ファシズムに抗して」とあるが、これはまさに2000年代に活発化する米国を筆頭とする国際金融や石油や兵器のビジネスが世界の秩序形成に大きな役割を果たそうとする中で、広範な人々にテロリズムに対する不安をいつでもどこでもかきたてることによって世界を一方的にまとめ上げようとする動きに対する危機感と対応している。

敢えてファシズムという戦前の時代を特徴づけた強いコトバが時代状況の描写に使われているのは、現在の「北」社会の状況が「50年前のファシズムと心理的にも、構造的にも似ている (44ページ)」からである。

私自身は第二次世界大戦後生まれで、戦前の日本のファシズムを体験したことがない。しかし、学校や本で日本やドイツやイタリアのファシズム期について学んだことはある。本書は、読み進むうちに、一度は連合軍の勝利で過去の出来事としてしまったはずのこの亡霊が復活しかねない状況を、国際政治経済・社会・文化的文脈の中に位置づけている。私たちが日々生きる時代を突き放して解読することは、それを可能にする分析用具がないと時代状況の中に、形成される秩序に対して時たま違和感を感じても「仕方がない」、「そうはいつでも決まったことだ」と埋没するか、従ってしまう。

イタリアでは、失業と格差が広がる1920年代、やがて政権を奪取してしまうファシスト党によって、よく人々を納得させるコトバとして使われたのは、「汽車が時間通り着く (Il treno arrivo in orario)」であったそうである。それ以前、イタリアでは汽車の遅れが日常茶飯事であったので、多くのイタリア市民はこのルールの遵守で社会がよくなったと喜んだとのことである。

私も雑然さが当然の風景となっていた日本の大学キャンパスや駅周辺のいちば的商店街がどんどん整理され、巨大なコンクリートの箱に収められていく風景を見ていて違和感を感じることもある。美化ポリシーが、それ自体必ずしも否定できないものの、そのイミするものは何であるのか考え込んでしまう。世界を一方的に律しようとする暴力の仕組みとそれをみずから受け入れてしまう時代状況と、この一見いいことづくめの「ルールの順守」という整頓思想を関係付けて考察する知的作業は今日極めて重要に思える。

こうしたイミで、従来の「常識」に惑わされないうで、グローバル政治経済と軍事警察化しているグローバル覇権などについて、批判主体・再帰的な分析を加えることで、今日の政治経済学と社会

学・人文科学との学際的な理論をつくりあげる  
トッカカリとして（259 ページ）世界でもっとも  
不安全正確状況に置かれている人々の立場やその  
原因を考えようとする本書は、国際学の一つとし  
て是非おススメしておきたい<sup>(14)</sup>。

## 結びにかえてーいま大学人とは

以上 1990 年代に国際学部および明治学院大学  
全体で私が出会った大学人 6 人の著作 6 冊を君た  
ちに紹介することで今国際学とは何かを発見する  
きっかけを創ってみた。なぜあえて 6 冊なのかは  
ただ紙面と締め切りという制約によるものだ。ま  
だまだこの時代に私に知的好奇心と学びへの謙虚  
さを教えてくれた先生は何人もおられる。いずれ  
その先生の著作も紹介したい。

今回の 6 冊はいずれも社会科学，人文科学，自  
然科学と多岐にわたった作品であるが，それを手  
掛けたさまざまな学問専門分野の先生たちに一つ  
の強烈かつ，力強い貫きないしこだわりがある。  
それは学問とは私たちが生きる時代と世界を突き  
放して考える営みであり，そのためには決してブ  
レないことである。したがって大学人とは単なる  
専門知識の保有者だけでなく，その真実を勇気をも  
って表明し，時代の思考軸を広く私たちに提供  
する存在でもあるのだ。

このこだわりは 2011 年 3 月 11 日の出来事以来  
ますます必要となつていっていると思われる。どん  
な世界に私たち，君たちは住みたいのか，時代と世  
界を丸ごと考えてみよう。確かに，その学びの道は  
石ころだらけで，いつも登り坂だ。すぐに解決策  
を出してくれないかもしれない。だからどうなの  
だ。あきらめないで学ぶ。それしかない。このブ  
レない学びのスタンスこそを私はこれらの先生か  
ら目の当たりに学んだ。このブックレビューを「ボ  
クのセンセイ，コクサイ：国際学部 1990 年代」と  
題したのはそのためだ。また本稿では，「先生」，  
「国際」，「私」がカタカナになったり，「ボク」に  
なったりしているが，その流れの中で使いわけ，  
あえて統一はしなかった。

最後に 2011 年 3.11 の直後の 3 月 19 日土曜日に

横浜キャンパスで実施された国際学部臨時卒業式  
に際しコクサイとは卒業生にとってなんであつた  
かについての私のメッセージを付属資料 2 として  
掲載したので，これも参考として読んでみてほし  
い。

## 注

- (1) この指摘は 30 年ぐらい前，雑誌「科学」であるメー  
カーのエンジニアが電子計算機の進歩は必ずしも  
人々の幸福感には結びつかないと警告した記事に触  
発された。
- (2) 「いのち」という日本語をどう感じ，考えるかにつ  
いては哲学者の花崎皋平氏の明治学院大学国際平和  
研究所での講演録と「いのち」の定義に言及した筆者  
の前書きのある『南を考える』第 9 号，2007 年，を  
参照。
- (3) 経済成長や絶えざる開発を追求しなくても，「北」  
の世界はホドホドまでの生活手段で十分に楽しく生  
きていけるという時代思想が近年登場してきている。  
この文明的問いをフランス，イタリア，日本の研究者  
と話し合ったシンポジウムのまとめは以下の作品を  
参照。勝保誠，マルク・アンペール 編著，『脱成長  
の道一分かち合いの社会を創る』，コモンズ，2011 年
- (4) 私のイリイチと玉野井先生との出会いについては  
「イバン・イリイチとの思い出」，季刊『環』2003 年  
冬号，藤原書店，付属資料 1 を参照。
- (5) 「生命系の経済に向けて」（169 ページ）
- (6) 前掲書，「生命系の経済に向けて」（34 ページ）
- (7) 本書の書評は，当時の同僚，丸山真人氏（現東京大  
学）が編集した「＜地域＞に根ざし＜生命＞を大切に  
する広義の経済学のすすめ『玉野井芳郎著作集』全四  
巻」で私が「南北問題のパラダイム—『等身大の生活  
世界』を読む」というタイトルで見れる。『国際学研  
究』第 8 号，明治学院大学国際学部，1991 年
- (8) イエズス会とガリレオの関係については，ウィリア  
ム・パンガード，上智大学中世思想研究所監修，「イ  
エズス会の歴史」，原書房，130-131 ページ，2004 年，  
を参照。
- (9) 英文オリジナルは，Bulletin of the Atomic Scientists，  
The Bulletin Online，The February 12, 2007 edition，全  
邦訳は PRIME No.30，明治学院大学国際平和研究所，  
13-14 ページ，2009 年，に掲載。
- (10) 原子力発電の非現実性に関しては，国際学部の同僚，  
熊本一規，『脱原発の経済学』，緑風出版，2011 年，  
をぜひおススメしたい。
- (11) 明学のキャンパスで展開した歴史的時期の記録は  
『ドキュメント明治学院大学 1989—学問の自由と天  
皇制』，岩波書店編集部，岩波書店，1989 年，を参照。
- (12) 森井センセイは 2007 年においても今の日本が何を

理想としなければならないかをインタビューで話されている。以下の資料を参照。

動画リンク (You Tube) 「明治学院大学元学長 森井眞さんに聞く」

Part1: <http://www.youtube.com/watch?v=roulw5s0A14>

Part2: <http://www.youtube.com/watch?v=mZXLd12t9zc&feature=related>

- (13) 『心に刻む』の一部は中国語、韓国・朝鮮語、ペルシャ語、スワヒリ語、フランス語、ポルトガル語、英語、スペイン語など 10 カ国語に訳され、明治学院大学国際平和研究所ホームページで閲覧できる。

URL:<http://www.meijigakuin.ac.jp/^prime/>

納得したら世界の友人に伝えよう。

- (14) 武者小路先生のアイディアに触発されて私も人間安全保障の主要アクターとしての市民社会に焦点を当てた以下の本を編集した。勝俣誠（編著）『グローバル化と人間の安全保障—行動する市民社会』, NIRA チャレンジ・ボックス, 日本経済評論社, 2001 年。  
なお日本の外交政策に対して人間の安全保障はどう活用できるかに関しては、勝俣誠, 「外交政策としての人間の安全保障—人権大国へのロードマップ」, 『国際問題』, No.603, 日本国際問題研究所, 2011 年 7・8 月号, を参照。

(付属資料1)

イバン・イリイチの想い出

彼が逝ってしまった。彼が重いガンに冒されていることを知ったのは、この夏(2002年6月)、パリでエコロジーから開発批判を近年手がけているセルジュ・ラテウシュからだ。ラテウシュは、イリイチも一章を担当している Dictionary of Development, ZED 出版(邦訳『脱「開発」の時代』晶文社)の一執筆者で、最近あったセミナーでのイリイチは近代医学に頼らず麻薬で痛みを抑えながら報告していたと教えてくれた。

彼の作品を初めて知ったのは、今から30年前、私がパリにいた頃、友人に勧められ『エネルギーと公正』を読んだときだった。都市の生活スタイルを根本的に考え直すアプローチが印象に残った。その後、日本でシンポの後の新評論主催のイリイチを囲んでの飲み会でお会いした。今は亡き玉野井芳郎先生などがいらしたが、イリイチとどんなお話を交えたかは覚えていない。ただ、飲み会の会費がやや高かった(藤原さんすいません)、一緒にいたドキュメンタリー映画監督のAさんと、飲み会の方は遠慮しますとイリイチに言ったところ、彼は着ていたメキシコ風マントの中に手を入れ、すぐ一万円札か五千円札を私たちに握らせてくれたのを覚えている(イリイチさん、ありがとう)。

イリイチの作品をすべてこなしただけでないが、私にとって、彼は何よりも先ず近代を奇異なる対象に仕立てあげる思想家だった。かつてトックビルが独立直後のアメリカ合州国を旅して『アメリカのデモクラシー』の中で貴族の立場か「機会の平等」にある不安を表明したように、やや単純化した表現だが、近代資本主義社会における権利の拡張運動を、未だサブシステンス経済を生きる「南」の女性たちも含めた小さな人々の近代＝開発を前にした戸惑いの立場からイリイチは現代文明再考として切ろうとしたのではないだろうか。当選ながら、彼の切り方は既存の学問流域(例えば、経済学、社会学、哲学)にピッタリと収まら

ないので、当初イリイチを学術論文に引用していた研究者は次第についていけなくなり、いつの間にか学会からは彼のレフェランスは消えていた。私から見れば、だからこそ彼は偉大な思想家であったと思う。自分の専門分野内で脱構築するのはそんなに難しい作業ではない。しかし、時代を脱構築するには、自身の生活をも対象としなければならない。これはイリイチが私に与えてくれた教訓の一つだ。

(西アフリカ・ダカールにて。2002年12月15日記)

(付属資料2)

卒業する君たちに

2011年3月19日

勝俣 誠

卒業おめでとう。今回、君たちに直接会ってお別れの挨拶ができなくなったので、電子メッセージを送ります。

大学は学びの場です。君たちは毎年、ほぼ同じ年で卒業しますが、私は確実に年を取っていきます。先生とは、まさに先に生きる存在です。

しかし同時に、先に生きたからといって教授になったからといって、君たちが国際学部で学んできたように、自分はもう学ばないということではありません。私と君たちとの共通点は、私も学ばせてもらったという意味で同じ学徒(scholar)であることです。

では、私は君たちから何を学んだのでしょうか。それは疑問の持ち方です。先生になると、とかく自分の問題設定で世の中を見がちで、学生達の疑問に必ずしも答えない授業や指導をすることが出てきます。たとえば、私のゼミで行う「南」の地域での校外実習では、ゼミ生は自分では設定したことのないようなユニークな問題提起や発見を私にさせてくれます。かつて13人の参加者がいたアフリカ実習では、帰国時のゼミ生のレポートを私は「26の瞳」と名づけました。

では、先生は学生に何を教えたのでしょうか、いや自分は何を君たちに学んで欲しかったので

しょうか。それは何よりも世界を呼ぶ道具の一つだけでなく、いくつも提示し、身近なモノやコトに使ってみることでした。そして、私以外の先生の授業も幅広く取って欲しいとも言いました。卒業したときに様々な教員が教えてくれたいくつもの道具の入ったずっしりとした道具箱を君たちは持っているのだと思っています。

私の授業やゼミでは、何をすべきかは教えませんでした。何をこれからすべきかを選ぶ道具を教えたのでした。しかも、その道具を使って得られる成果は、卒業時すぐに表れません。数年後、10年後、いやもっと後になるかも知れません。なぜなら、それは知という目に見えない道具だからです。それは何よりも考え方、感じ方に依ります。国際学部の教えた多様な知は、少々世の中が変化しても、しっかりと作動すると思います。失業したとき、失望したとき、自信をなくしたとき、道具Aがだめだったら、道具Bで対峙し、それも駄目だったらCで考える。まさに全天候に耐える、生きること決して絶望しないための道具箱を運んでいって欲しい。

今回、卒業式が中止となった2011年3月11日の出来事の原因は、国際史という道具箱からすればいろいろなことが既に見えてきているはずです。私たちが日々なくては生命を維持できないエネルギーとは、どんなものがあり、どのような作られ方をしているのか。地震という地球物理のロジックと自然の上に生まれた人類のロジックと人類社会はどう折り合ってきたのでしょうか。これは自然系の命の学問です。では、この人類社会は、どんなルールで、どんな権力や富や市場のもとで人類社会を組織したのでしょうか。こうした問いは、社会学系からの命の学問です。そして、そもそも、人はこうした自然や社会の条件の下で、ああでもない、こうでもないと問う自分とは、一体何なのか、なぜ生きるのか、生きるイミを問ういわゆる人文系(humanities)の学問があります。

こうした少なくとも3つの道具の系から見えてくる問いは例えば次の3つです。

- ・土地や核の持つエネルギーはすごい。
- ・地殻変動はどうにもできないにしても人が考え

出したエネルギーとは一体何なのか。人類生活をより便利にしてくれるはずだった核エネルギーがなぜ逆に人々を苦しめているのか、そもそも、この便利さを追求して止まない私たちの文明のカタチとはいったい何なのか。

人類未曾有の危機を前にして、今こうした日本だけでなく、世界が問い、答えなければならなくなっているようです。

危機は新しい希望を生みます。1945年やはり未曾有の犠牲者を出した戦争をした日本の人々は、自国のことだけでなく、世界で暴力や貧困で困っている人々のことも考える国際社会で認められる立派な国になりたいと宣言し、そのためには戦争を二度としないという憲法という国のカタチを認めました。

2011年3月19日。日本は今大きな危機に直面しています。これは日本だけでなく、私たちが享受してきた現代文明の危機でもあります。私たちはどれだけエネルギーを使えば幸せになるのか、より安全でより少ないエネルギーで、より愉しく生きれる文明はあるのでしょうか。

こうしたとてつもなく大きな問いに対して、国際で学んだずっしりした道具箱は、これからも役立つと思います。皆さん、その学んだ道具で、「私たちはどんな世界に生きたいのか」を考え続けて下さい。

「国際学」入門おススメ 6 冊